Meisei University

頭脳錠前師（抄訳）

フリードリヒ・デュレンマット
佐々木　滋*　訳

愛

愛は自分自身から逃れ、自らをひとりの他者のなかにみようとする希望なき試みとなる。実際このようにどんな愛の歴史も、最も崇高な恋であれ、きわめてありふれた愛であれ、最もグロテスクにして悲しい愛であれ、なにか壮大なもの、月並みなものを同時に有している。そしてその愛が月並みで終われば終わるほど一段と悲しいものである。善良な夫もしくは妻、あるいは善良な乙女が、かれらの不幸な愛から逃れたことにだれもホットするにせよ、すなわち、愛が不幸であっても、愛はやはり愛なのである。どんな愛も交互に関与者たちが落ちたり、あるいはたとえ落ちなくても、その試験には関与者はやっとのことで合格したり、聖者の輝きをもって合格する自分自身を前にする試験であるというこの事情は、最も厄介なものであり、そもそも人間は愛を冒険することが人間の逆説的名声である、と人間からこう言わせる最高のものなのである。

（一四・一三八）

愛とは再三再四、可能な奇跡であり、悪事とは常に存在するひとつの事実である。正義は悪事を罰し、希望は改善を欲し、そして愛は見落とす。愛だけがあるがままの恩恵を受け入れることができる。何ひとつ困難なことは存在しない。わたしにはそれが解っている。この世界は恐ろしく、無感覚である。

（二二・一四九）

権　力

商業の世界とそれに伴い商業概念の領域が、すなわち資本主義的世界を――それに対してわたしは最小資本さえ持っていないが――より多く破壊すればするほど、不可避だと思われる社会主義的言語の領域により多くわれわれが陥れば陥るほど、この世界は絶対的権力によって用いられ得る諸概念に圧倒される危険をますます多く冒す。単にお金だけが権力を授けるのではなく、概念も権力を授けるということ、絶対的権力は最大の商売であり、権力なるものはそれが絶対的な概念システムと絶対的なイデオロギーを意のままにするときにはじめて絶対的なものになる、ということをわれわれはあまりにも忘れやすい。

（三五・一〇一F）

ヒットラーとスターリンからもはやワレンシュタインをつくりだすことはできない。かれらの権力は非常に巨大であるので、かれら自身は任意に補うわずかにこの権力の偶然で外的な表現形態であるに過ぎない。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

そして人がとりわけ最初の者とまたかなり第二の者と結びつく不幸は、かなり広く分岐し、あまりにも混乱し、残忍に、あまりにも機械的となり、しばしば単純にあまりにも馬鹿げている。ワレンシュタインの権力は、氷山では大部分が視界の外、抽象下に沈んでいるように最小部のみが可視的なのである。

（三〇・五九）

絵　画

肖像画の描写として絵を描くことは、写真撮影とは異なり、模写することよりも想起することに大いに比較可能なひとつの経験である。人間についての仕組みの記録のために、われわれは人間による人間の証言を必要とする。具体的なことが一次的であり、抽象的なことは二次的なことである。世界は具体的なもののなかに含まれ、抽象的なもののなかで現象として消去されるが、しかし形態としては再構成される。人間の具体的なものとは、人間の各々の個性であり、比類なさである。われわれの思考が陥る通路は、確実に、個人的なものを好まない。われわれの時代は抽象のために（学術的に、経済的に、政治的に）必要とされる。われわれの時代は予想のつくものを必要とし、最後に計画することを学ばなくてはならない。個人的なものは当てにならず、煩わしいながらも存在する。絵画は時代の趨勢を繰り返すことができるか、あるいはそれに抵抗できるかであるが、絵画は時代の趨勢からは逃れられない。そこでモーツァルトに逆戻りすることはできない。絵画は抽象的であるか具体的であり得るが、しかしもはやロマンチックではあり得ない。絵画は余すところただ一般的なもの、掟、形あるいは個人的なものだけに照準をあてるにすぎない。個人的なものとはそれが何か絶対的なものとして置かれ、不可避の情勢が強制するひとつの弁証法的な対抗手段として理解しない場合にだけロマンチックであり、それとともに市民的である。個人的なもの、そしてそれとともに絵画の目標としての具体的なものは、もはや今日では時代趨勢の矯正策としてぜひ必要な反対派としてのみ可能であるに過ぎない。牧歌的生活もしくはアナーキズムとして理解される個人的なものとは、時代に逆行する不必要な反動以外の何ものでもない。

（三二・一七八f）

人　間

われわれは宇宙の歴史の最初の三分間を人類の歴史の最初の三百年よりもよく知っている。ただ天体がではなく、人間なるものが予想し難い。このことはあまりにも自然である。

物質の組織であるとみなされるのは、銀河でも準星でもなく、赤い超巨星である牡牛座の一等星でも、われわれがわが太陽と称する黄金の矮星でもなく、われわれによく知られた世界の極めて錯綜した創造物である人間である。その構成のなかで、その相互にかみ合う化学的なプロセスあるいは外的刺激へのその反応のなかでも同様に、ホモ・サピエンスとして動物学的にすでに長いこともはや珍品でないこの被造物が、再び調和し合い、隈無く作用する細胞へと結びつく無数の巨大な分子から構成され、個々の細胞の遺伝的な暗号を合体させ、自分の意志、思考、論理的な推論を生み出す人間の脳の極めて込み入った物質的な構造に操作され、しかも自分の本能に定められて人間の無意識、人間の予測しがた

NII-Electronic Library Service

Meisei University

い情緒と攻撃、然り、動物に比較してさながら合理的生物と思われる人間の途方もない不合理性。

そして、まず最初にわれわれが人類の多層性を、再三再四、殺人的に無意味に自己自身に対して向けられるひとつの超組織の超組織を総体として考慮に入れるとなると、われわれが何かを歴史的な合法性だとしていまやそれは社会的、経済的、心理的もしくは非合理的だとして偽称したのであった。最善の場合でも、単にあいまいな諸前提だけを認める不完全な統計と予測による説明の試みであり、最悪の場合は、単に美的に制約された冒険小説の各見出しであるに過ぎない。これをわれわれは世界史と称している。すなわち人間と人類が《それ自体》非合理的であるからなのではなく、かれらが《それ自体》説明がつかないからなのである。人は自分自身を知るべきだ、と要求したデルフィのアポロのごとく、ソクラテスは自分が何も知らないことをただ知るだけであることを白状したのである。

（二八・五八F）

人間とは計算で合うようなものではなく、文書にされるであろうような書式でもなく、人間とはひとつの秘密である。あたかも人間が表現可能であるかのように行うことをわれわれは必要とする。われわれは舞台上である欠乏から演じ、われわれは虚構へと強いられる。われわれの劇場、どの劇場も、われわれの文化、然りいくらか正確にみよう、われわれの社会、どんな共同体もこの強制に基づいている。真実は演じることができない。われわれは正しく行動することもできないのではなく、ただ誠実にフェアーに行動できるだけであるように、ただ真実に演じることができるだけである。すなわち、われわれはこのような自明なことを止めることが舞台、世界を再三再四、田舎芝居にしている。

（三〇・一二二）

モラル

われわれは皆、ものを書く者も皆、われわれがこの世界に満足であるかどうかを経験する。その世界のなかでわれわれは隠れたり、その世界に抗議したり、世界を変える計画を構想したり、参加したり、政党に与したり、あるいは世界を変革しようとするものを結成したりする。無数の共同体の、文化的で政治的で、そして経済的な糸によって総体としての世界とともに編み尽くされるだけでなく、われわれが総体として見渡すことの出来ないひとつの国家の一員として、われわれが望もうと望むまいと、外部に影響を与える一民族の一部分として、他の諸々の自治体に同化する一教区の一員として、あるいは企業の側では再び他社と結合されるどこかの会社の従業員として編み尽くされるものがわれわれであるが故に、われわれは共に行うのである。すなわち糸玉は解き難く、糸の混乱に関する諸理論だけが存在し、一握りの事実だけが存在し、ほとんど大方は漠然としか予測できない。抗議の申し立てであれ、われわれは意図せず共に行い、時代の流れのなかで漂流する。

共に行うことは最初から否定的である筈はない。われわれは区別をする。すなわちわれわれが共に行うこと＝ひとつの道徳的に肯定的な共同行為であることの必然性をわれわれは納得させられるが故に、われわれは共に行う。たとえわれわれが共に行うこと＝道徳的に否定的な共同行為であることの必然性をわれわれは納得されないにせよ、われわれは共に行う。もし、肯定的な共同行為が共に行う事柄から、その共同行為者

NII-Electronic Library Service

Meisei University

が雇われるなら、たとえ否定的な共同行為者が共に行っても、かれは雇われない。かれの共同行為とは同行であり、譲歩することであり、虚弱さであり、道徳的な立場での不足である。肯定的な共同行為者が積極的であれば、否定的な共同行為者は受動的である。肯定的な共同行為の場合に、かれが共に行う事柄を何か必然なこととして認め、何か良いこと（この事柄《それ自体》もまた必要であるか否かが一体どうしてどうでもよいのか。良かれ悪しかれ自分の共同行為についての価値判断は、かれがこの認識を持つか持たぬかの自己認識への信仰のなかにだけある。自分の認識《それ自体》が正しいであろうか否かの認識への信仰ではない。― 欺かれた肯定的な共同行為も存在する。）として認めることが重大であるならば、このように認識あるいは、ある人が共に行う事柄の誤認は否定的な共同行為において何の役割も演じない。すなわちかれは事柄のためにではなく、自分のために共に行う。否定的な共同行為は（人が共に行う事柄に向けられる）認識をめぐって自分を関わり合わせないことであり、認識の非実現、認識によらぬ好意であり、人が共に行う事柄は、単に必要であるばかりか、悪でさえあるという認識に逆らう行為でもある。

認識への信仰なしに認識の習得が存在しないという点では（なぜなら剝き出しの認識は存在しないからである）遂には信仰の馬耳東風である。もちろん怠惰からの否定的な共同行為もある。すなわちかれが共に行う事柄がちょうど流行などであるから、考えることなく共に行うのである。しかし憂慮すべき形での本来の否定的な共同行為者は、それでも共に行う知識人である。この知識人は断じて《専門馬鹿》である必要はない（それにはまだ何かが容赦するであろう）。決定的なのは知識人には道徳的な感覚が欠如していることである。この不足は知識人に纏わる本来、虚無的なものである。ある者がかれの知識に逆らって行動するかしないかということは、必然性の知識には自己の実現も従う、という意見であるものにとって理解はできない。もしも、このことがそうであれば、世界は異なったものであろう。道徳、そもそも人はこの言葉を表向きの法律の無意味な遂行として決まり文句でなく ― 存在しないモラルが見解としてではなく、掟として理解されて ― なおも敢えて用いようとする。道徳はすでに必然性の知識ではない。道徳はこの知識の実現である。

（一四・一〇五FF）

国家

人間の運命は、各人の生命を厳粛に奪うことに政治が最後にしぶしぶ承知するか否かに、あるいは娼婦は一般に犯すことのできないものたちのために街路にでるのかどうかに依存するであろう。婦人は自ら決定しなければならない。今日問題となる彼女らとやらかす地位ある政治家はひとつの侮蔑である。その侮蔑で理性は恥顔で赤らみ、決して問題とならないかの人々。すなわちこの地球に住む残りの数十億人の者すべてを永続的に恐れさせる。かれらがそれにて各個人を無視する政治の頑固な不正は、愚か者の永続的方法に即して単なる事実と見なしながら、ひとつの抽象であるものすなわち、個人が決して持たないすべての活動根拠をかれらがその国家に責任転嫁させて、遂にはかれらに対して相変わらず寛大であったり、天使の舌で語ることは阻止される。とりわけ現在、肝要なのは、そこで演じられるものについて何ひとつ理解されず、把握されていないことである。すなわち、今日の政治の無意味なことは余りにも明瞭である。両陣営によって第三次世界戦争で演じられるような類

NII-Electronic Library Service

Meisei University

の方法は、戦争は愚劣な犯罪であるばかりか、大いなる愚行であるからもはや何を以てしても弁解され得ないのである。

（三四・一五）

スイスについての文

第二次世界大戦はわたしをわたし自身に押し戻す。わたし自身の監獄の中へと。世界から遮断される感情下に。わたしは政治的に決して貧困から自分を保護して守り通さなかった。スイスは世界史から忘れ去られた。それが一切であった。スイスは不条理であるようにわたしには思えた。以前ある論文で「スイスの終焉について」を方々で書いた記憶がある。それはよく思い出せる。ヨーロッパのなかで簡単に溶解するスイス。戦争によらずして経済によって。なぜならスイスはもはや利子を生まないから。なぜならスイス人であることに余りにも多くの不利を抱え込んでいるから。しかしスイス人であることでわたしは悩んでいない。

（二九・七五）

連邦共和国とのスイスの関係は弁証法的に語られ得るにすぎない。一方の隣国は逃れたことの結果であり、他方の隣人は崩壊の結果である。一方は手配し、他方は手配される。双方には多くの悪い良心が関わり合っていて、双方は重なり合って喋るに至っている。一方の側は他方の側を非難する。ひとりの英雄のいる一方は、英雄のいなかった他方を非難し、一方の側は一人の英雄がいたことをやはり補足的に誤って想像する。他方は英雄を攻撃することをただ敢えてしなかったことで、他方は苦しむことなく商売ができた他の者たちを訴える。これを認めるにせよ、このことは親密な同棲生活ニュアンスがあり、中央ヨーロッパ的な同衾会話である。

（三四・一二七）

スイスの名誉領事がかれの車での長いドライブでわれわれをプエルトリコを縦横に案内してくれた。この島は丘状である。名誉領事とわたしとはエメンタール出身であるから、われわれにはこの風景は何か熱帯的な異国のエメンタールであるかに思えた。われわれふたりは誇りに思った。プエルトリコをでなく、エメンタールを誇りに思った。

（三四・九五）

今では人が思うほどスイス人であることは全く容易なことではない。確かに立場は例外的な立場であり、峠道として進路に高く位置するが、しかし同時にこの立場に厄介なものでなくとも、やはり滑稽なものに何か相応しく、そしてそれはとりわけわれわれがほとんど所有していない徳を必要とする。すなわちこの立場を害することなく克服するためには自分自身に対するユーモアを必要とする。

（三二・一一六）

ゴットヘルフの偉大さは、かれが訂正を行わずに何ひとつ取り消さなかった点にある。だから、手法、執筆技術なども個性的であった。二・三の者は入念に構想し、他の者は軽はずみに、そのまた他の者は全く構想しない。だが言葉は理解できなければならない。その自明さは決定的なものである。それがひとりのスイス人にとって、しばしば書きづらいものとなる。すなわち、かれは自分の言葉の自明さを信用せずに、自分

NII-Electronic Library Service

Meisei University

の言葉は自分が語るスイス・ドイツ語の《話し言葉》に影響されているという先入観に余りにも容易に陥る。かれは自分が書こうとする言葉を何か客観的なもの、習得可能なもの、学校やドーデン正書法に倣ったものとみなす。かれは自分の言葉を敢えて発言しない。そのため言葉はかれにとって言葉のあるまじきものとなり、かれの性格、思考力、遂にはかれの自由などの表現とはならず、むしろかれの訓練の結果であり、文化的な劣等感情に根差す不自由との結果である。このことが、かれはそれを認めることなく、スイス人として、非ドイツ人として、小国人として余りにも容易にかれに付着しているのである。すべての文体を模倣するようにかれができることで、あるいはそれが何であれ、かれの言語はぎこちなくなるか、あるいは態とらしくなり、無味乾燥となるか、あるいは文学に通じるようになり、ゲーテ風か名人芸となる。かれは自分の方言と書き言葉との間の緊張を利用し尽くすことなく、かれが書く自分の中高ドイツ語に由来するからそれを直接に感じる言葉を自明さによって豊かにすることなく排除する。このような誤りにわたしでさえ陥ったのである。それを克服するのには幾年も要するであろう。

（二九・一六三F）

プラトンはかれの『ポリテイア』の終章で、死後、各人の魂は新たな生命への運命を選ばなくてはならない、とのべている。すなわち、「だが、偶然オデゥセイウスの魂は最後の運命を得、いまや選ぶために歩み寄った。しかし、彼女は自分の昔の辛苦を想起して全ての虚栄心を放棄したので、彼女は長い間、彷徨ってひとりの隠遁した穏やかな男の人生を捜し、ちょうどどこかで他の者たちが気づかずにあるがままにしてあったある人生をみつけたのであった。彼女がこれを発見したとき、わたしがこの最初の運命を得たなら、わたしは同様に行ったであろう。そして喜んでそれを選んだであろう。」とある。わたしはオデュセウスがひとりのスイス人たる運命を選んだことを確信する。

（三六・一八七F）

書くこと

娯楽文学

人間は慰められようとするものであることが依然として著作物生産に関わる人間たちとって最も強い刺激である。かれらは人間的な娯楽本能を計算に入れながら、とくに偉大な作家たちは往々にして楽しく書いている。かれらは自分たちの仕事を理解している。

（三二・五九）

はなしを物語る

作家にとっての物語、はなしの余地はまだあるだろうか。あるものが自分について語ろうとしないでロマンチックで叙情的であろうとするだろうか。わたしは概括していうのであるが、作家が自分の希望と敗北について語るのに、また、飽くまでも誓って、ご婦人方との添寝の方法について語るのに強制を感じない。真実がこれら全てを一般的なものに移すであろうように、また医学、心理学的なもののなかにはさほど多く（あるものがこれを行おうとしなくても）分離して後退するであろうように、自分の材料を前にする彫刻家のように自分の素材なる個人的なものを礼儀正しく守り、それに従事しつつ、発展させながらすぐには絶望しない一種の古典作家として試みる。至るところで現れる純然たる無意

NII-Electronic Library Service

Meisei University

味は、ほとんど否定できないにしても、やがて書くことは一段と困難にそして孤独になり、無意味なものとなる。文学史でのよい点数などは興味がなく、―だれもが早くも点数を貰わなかったか、どのような不手際が早くも目立たなかったのか―一日の要求がより大切である。

（二一・三七）

素材

作家は世界をどのように形成し、どのようにしてその世界に表情を与えるのか？　おそらく、もはや不可能である哲学とは何か異なるものを作家は決定的に行いながら、深い意味を決定的にはたらかせながら、世界を素材として役立てながら。世界は石切場であって、そこから作家は建物のために岩塊を切り出そうとする。作家が行うものが世界の模写なのではなく、新たな創造なのであり、独自の諸々の世界の作成なのである。この独自の世界は諸々の素材がその組み立てのために現在におくことによってひとつの世界像を与えるのである。では独自の世界像とはなにか？　もっとも極端な例。ガリバーの旅行。このなかには一切が発見される。さながら新しい次元の世界が作り上げられた。だがこの内部の固有な論理によって一切が再びわれわれの世界の像となる。論理的な独自の世界はわれわれの世界から全く脱落できない。世界との芸術の一致。このことが大切なのである。われわれは素材だけに従事しなければならない。これで十分である。素材が合っていれば、作品もまた適合するであろう。このことを作家が理解したのなら、作家は個人的なものを見捨てて他に転じるであろう。ひとつの新しい客観性とひとつの新しい古典主義の可能性、お望みとあらば、ロマン主義の克服が作家に開かれるであろう。

（三二・六七F）

作家の立場

今日、世界は月面背後にある諸点からのみ観察しうる。距離とはみることである。叙述しようとする諸々の像が人々の目をふさぐとしたら、人々は一体どのようにしてみようとするだろうか。作品を書くために苦悩を一種の独占をつくりだすかのごとく、自ら体験しなかったものを叙述することは許されない、という異議が投じられる。しかしダンテは地獄にいただろうか？　それゆえにみなさんは目によるものを語るのではなく、精神によってみたものを語り、一人の者にお気に入りのものについて語るのではなく、一人の者が脅かされるものについて語るわたしのような作家も現在、承認してくださるにちがいない。わたしは一介のプロテスタントであり、抗議をする。わたしは疑わないが、わたしは懐疑を叙述する。わたしは危害を加えられなかったが、わたしは没落について叙述している。なぜというに、みなさんがわたしのことを推論するようには書かない。むしろみなさんが世界を推論するように書く。わたしは警告を発するためにここにいる。紳士淑女のみなさん、船乗りたちは水先案内人を軽視しません。水先案内人は操舵の術は弁えなくても、また船の運航に融資できなくても、浅瀬と流れを心得ている。それが海上でなら尚更である。しかし、ひとたび岩礁が現れると水先人が必要とならざるを得ない。

（三二・三二）

いかに叙述するか？

美学が芸術家に対して出す諸要求は日ごとに高まっている。すべてが

NII-Electronic Library Service

Meisei University

きわめて完璧なものしか追い求めていない。完璧さは芸術家によって要求される。ひとは完璧さを古典主義者たちのなかに解釈を加える。―誤って考えられた退歩。そしてひとは芸術を見捨てている。このように雰囲気は生み出され、そのなかでしか文学は学ばれるに過ぎないが、もはや作られはしない。

芸術家は教育の世界、読み書きのできる人の世界でいかにして存続するのか？　わたしを締めつけるひとつの問、これに対する答えをわたしはまだ知らない。芸術家は探偵小説を書きながら、だれも予測しない芸術をそこで発揮するのが一番よろしいであろう。文学は今日の文芸批評の秤ではもはや計測できないほど非常に軽くなるにちがいない。ただそんなふうに文学は再び意味深いものとなっている。

（三二・七一F）

罪

悲劇は罪、艱難、程度、展望、責任などを前提とする。われらの世紀の旧習下において、この白色人種の最後の舞踏時にもはや罪人、責任を負うべき人は存在しない。だれもがそのために何もできないし、望まなかった。実際、だれがいなくても事はすすむ。すべては感動させられたり、どこかの衣装かけに掛けられたままである。われわれは余りにも集合的すぎて罪深く、われわれの父、祖父たちの罪過に余りにも集合的に埋め込まれている。もはやわれわれは孫であるに過ぎない。このことはわれわれの不運であり、われわれの罪ではない。すなわち、罪はもはや個人的なはたらきとして、宗教的な行為として存在するに過ぎない。われわれに近づくのはもはや喜劇だけである。

（三二・三九）

学校

また、学校が大人たちの自惚れによってもともと設けようとした教育が子供らに寄与するために、人生を乗り切るために、名目上、設立されたわれわれが学校のことをいう子供刑務所は、わたしを徐々に打ち負かした。わたしは読むことを始めた。自明でなかったものを読むことを始めた。

（二八・三九）

言語

作家はわれわれが今日、言葉の彼岸に横たわるひとつの現実に遭遇していることに気づいている。そしてこのことは神秘教の途上にあるのではなく、学問の途上にある。作家は言葉を制限してみているが、こうした確認においてしばしば論理的な誤りをする。作家はこの制限が何か自然なものであるということをみない。―なぜなら言葉はとにかくイメージに捕らわれるに違いないから、制限は言葉にとどまろうとする―むしろ作家は言葉をその境界を越えて拡大しようとするか、あるいはさながら解き明かそうと試みる。今や言葉は何か厳密でないものである。厳密さを言葉は内容によってのみ、正確な内容によってのみ得る。言葉のスタイルである正確さは、その内在的な論理の度合いによって定められる。人は言葉に従事するのではなく、考えに従事するのであり、言葉を通じて考えに従事するのである。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

今日の作家は往々にして言葉に従事している。作家は言葉を分化する。そうすることで、自分が何を書くのかは根柢においてどうでもよいものになる。このように言うまでもなく、作家はたいていは自分自身のことを書いている。

（三二・六六F）

国家

人間は明らかに不幸せ者である。それは空を飛べなかったからではなく、―そうこうするうちに人間はそれが出来たのだが―人間は一人の人間であろうとする以上に、何か絶対的なものであろうとして再三再四、天国から誘惑されたからである。例えばローマ共和国が旧世界を整理するやいなやローマ共和国は帝国に変わり、皇帝は神と化した。人間たちはなるほど人間たちによって統治させるが、この人間たちを神々としてみようとする。これが天国による最初の人間誘惑である。

天国による第二の誘惑は変わりやすく微妙である。ローマ帝国皇帝が神である、とはおそらくローマ帝国皇帝でさえ思わなかった。帝国を天国のどこかに定着させるなどとは法的な苦肉の策である。神そのものよりも神の代表者であることの方が納得のゆく考えであることに、ようやく天才コンスタンチヌス大帝が思い至った。血を流す神は人間の前で釈明しなければならず、人は神の御名において血を流し、神と共に釈明できるのである。国家イデオロギーとして天国を使用できることになった。このことで何ら反キリスト教が唱えられようとしたのではなく、そうではなく、全てキリスト教国家に反対することが唱えられようとしたのである。この国家はどうやら余りにも汚れた指をもっているようにわたしには思われる。

（三三・二六f）

劇場

でもわたしに一番いいのはくだらない喜劇だ。わたしの劇団はドイツ国家の神聖ローマ帝国で最高にして最も貴重な劇団である。わが生活の茶番劇。真実の余りの逃走、真実を求める方々での労多き失敗。舞台の上が快活になると、踊り、笑い、快い誇示。現実の共演者は罪への巻き添えとなる犯人についての消息通。観客がただいるだけの自由な時間の思い違いをわれわれが必要とする限り。

（一〇・二三）

原喜劇（ウル）

あるこうした漫歩途中で言うほどの価値もない単にわたしが忘れなかっただけに過ぎない道化師の場面、いくらかこっけいなことが起こった。なぜならわたし自身が道化師であったからだし、自身何か可笑しかったもの以上にわたしには強い印象は残っていないからである。晩秋の午後、わたしは大学で忙しかった。カジノの前のテラスには幾列ものプラタナスが植えられていた。庭師が枝の剪定に勤しんでいた。かれは歩道に面したテラスの端に直に架けた梯子の上にいた。かれのそばを通り過ぎるとき、わたしはかれを観察した。そしてかれはわたしを観察した。わたしは足を滑らせた。路上に犬の糞があった。わたしは尻餅をついた。幸運にも汚さずに起き上がった。まるで何事もなかったかのように。庭師

NII-Electronic Library Service

Meisei University

は顔の筋ひとつ動かさなかった。ただわたしを見つめていた。わたしは大学へと歩いていった。一時間半後に戻ってくると、また庭師が別の列の最初の端の樹木に架けた梯子の上にいた。再びわたしはかれを観察した。再びわたしは滑った。路上には同じ犬の糞があった。再び汚すことなく、再び身を起こした。まるで何も起こらなかったかのように。再び庭師は無表情に。ただわたしを眺めていた。だがわたしはかれの眼差しをもはや忘れない。そこには無限の驚きがあった。ひとりのこの世ならぬ白痴に出会ったということの圧倒的な認識、庭師に言葉を詰まらせ、言葉だけでなく笑いも、微笑もあるいはその萌しさえも失うほどに。梯子の上のこの男にとってこの人間はかれの茶番それ自体に思われた。原喜劇として。かれはわたしの傍らで、わたしの二度の転倒、この滑稽なことの繰り返しの傍らで何か形而上のものを体験したのだった。わたしは当時この最初の数秒下に電光石火に思い浮かべた。今日でもなお思い浮かべる。なぜならこの繰り返しは不本意に起こり、道化の手管によるものではなく、滑稽なものを幾重にも繰り返すドラマチックなトリックに基づくものだからこそ思い浮かべるのである。わたしがわたしであったものとして庭師に思われることで、わたしには自分自身だと思えた。恐らくそれ故にわたしは喜劇作家になったのだ。くだらぬことが決定したり、可笑しい出来事がしばしばみたところ重要で悲劇的な出来事以上に人生を決定する。

（二九・一一五ｆｆ）

舞台と現実

劇作術とは常に新しいモデルと共に常に新しいモデルに挑むひとつの世界を形成する試みである。

（三二・一〇二）

寛容

どの着想もそれ独自の真実を持ち、どの着想もすべての着想内部でその権限を自明なことであっても、われわれが認める以上に多くわれわれを妨げるひとつの思慮を持っている。なぜなら思考領域のなかでわれわれは正しいことを言おうとするからである。まさしくここでわれわれは《現実》の世界から《思索》の世界のなかへと戦いを余りにも容易に排除するからである。精神的寛容はそれを前提とする政治的平和よりも問題である。すなわち精神的寛容は、どの着想も等しく真実であることを意味するはずはない。しかし他の着想においてはこのような問題を据えないのに対して、もし、着想を思い付く者がそれを《真実》だと思うならば、たったひとつの意味だけを持つ諸々の着想は存在する。寛容はそれがたとえ分割されなくても、誤りとして拒否されても、寛容は他の着想の軽視における以外のどこにも在り得ない。寛容は文芸かぶれの要求ではなく、だれもがまず最初に自分自身に据えるに違いない実存の要求である。誰もがその要求を他に据えれば、われわれ自身との戦いは、平和をめぐる戦いに先行するのである。われわれの体験下にそれを解決するだけの力がない諸経験を諸々の知識が前提としているからこそ、遅咲きの諸々の知識が存在する。

（三五・一四四ｆ）

NII-Electronic Library Service

Meisei University

大学

大学は知識が蓄えられる場であってはならず、知識が理解される場でなくてはならない。だが、理解される知識は拡大もなされ、それが拡大することで理解にふたたび新しい課題を出す。しかし理解されるどの知識もとりわけ二次文化と対比して第一の文化を所有しない諸々の伝統、慣習、言い伝えなどの全ての尊重においてそこで理解されるものの創造を表現する — その所有が詩とかソナタ、一枚の絵、哲学的な思索など何かおそらく作られ得るような知識のなかだけでの所有であれ、また作ることができないから、単に作られない知識、すなわちわたしが過小評価はしないがしかし、何か不利益なものとして過大評価もしない知識 — むしろ第一の文化が何はさておき何か別のものである限り、所有でもなく、むしろ所有理解であり、知識ではないが車であり、不利益なものではなく、これに反して先行するもの、詩、ソナタ、絵、哲学的熟慮などの制作による理解である。成功の確実性もなく、結果についての予めの知識さえもなく。そうであるならば、知識においてではなく、理解の方法のなかに理解を教える大学はいまや芸術的もしくは学問的な何らかの仕方の文化、そればかりか精神科学的にも、実験、知識の再考、批評、思考モデル、反イデオロギー、虚構的な網などなどの文化のなかに推測されたもの、推測されないものを理解することを投げ込まれているのだとわたしが大学を理解する如く、ひとつの大学は文化のなかへと吸収統合されるであろう。むろんそのようにも理解される文化の全ての疑わしさのための本能とも結びつけられる。なぜなら何かあるものが常に人間のためにチャンスであるからであり、人間の不幸となりうるからであり、人類を何ひとつ防御しないからである。

確かにこのような諸前提下の大学は、われわれの能力主義社会の関心下には全くない。知識はガリ勉して覚えられ、理解は時間を必要とする。青年から時間を盗む者は、青春期を成熟させない。だれも勤勉であることはできるが、しかし創造力のためにはある種の怠惰を必要とする。怠惰なしに学者たちは集まることが出来ない。かれらは余りにも迅速に早産児としてこの世に現れた。

（三四・一五七f）

わたしが大学生活を送った五年間に感謝するものはわたしを作家にさせた、ほんとうに本を読んだり、その本について論評されるのを聴く代わりに、それらの本にときおり腹を立てたりする余暇をもてたことによるかの慣行である。政治的なものの前でも停止しようとしない好奇心は各々の理解意志と理解探求を前提とするにせよ、ひとはやはり世界を少しずつ理解しようとするのではなく、総体として理解しようとする。政治に無関心な大学は不可解なものである。だがまさしく大学の政策は、政治を考え尽くすことにより際だたせればよく、ドグマ的なものの礼賛への落ち込みによって際だたせるべきではない。なぜなら苟も頭脳を必要とする者は、それを失ってはならないからである。

（三四・一五八）

不正

人間の偉大さは自分に遭遇する不正に耐えることができることのなかにある、とするソクラテスの意見とわたしは同じである。しかしながら

NII-Electronic Library Service

Meisei University

そのために、そのような不正に耐えねばならない偉大さを奮い起こす状況に至ることに、一人の人間を妨げる一切を試みることは、わたしの個人的義務とみなす非常に多くの偉大さを不正は必要とする。

（三三・九五）

世　界

世界は因果律で定められている。世界は最後の審判が定める。だれがこの幻想の高まりを疑うだろうか。これに匹敵するであろうような他のものはあるだろうか。楽園としての世界にわれわれは怖がって怯む。われわれは羊いっぱいの世界にうんざりするほど、他には少しも興味を示さず、牧草を食べ、餌を食べる群れをみる。われわれは自分自身をこの世界のなかへとみることはない。

われわれは可笑しな世界を思い描く。われわれは永遠の平和、完全に裕福な仲間関係を思う。なぜなら主観－客観の関係から抜け出せないのと同様に友－敵の思考から抜け出せぬからである。

（三五・一四八）

訳者あとがき

原典は『頭脳錠前師（ゲダンケンシュロッサー）―神と世界について』（ディオゲネス出版）と題されたうちの抄訳である。これは三十七巻からなるデュレンマット全集の各巻より部分的に引用・採録されたものであり、各出典箇所は各段落末に漢用数字でその全集の巻号とページ数を示した。抄訳に関係したものを次に挙げておく。

一〇、Die Wiedertäufer
一四、Der Mitmacher-Ein Komplex
二一、Der Hund/Der Tunnel/Die Panne
二二、Grieche sucht Griechin/Mr. X macht Ferien/Nachrichten über den Stand des Zeitungswesens in der Steinzeit
二八、Labyrinth. Stoffe I-IV
二九、Turmbau. Stoffe IV-IX
三〇、Theater
三二、Literatur und Kunst
三三、Philosophie und Naturwissenschft
三四、Politik
三五、Zusammenhänge/Nachgedanken

NII-Electronic Library Service